



Title	「ムハーシル民族」への視角：エスニシティの「統合」をめぐって
Author(s)	近藤，高史
Citation	アジア太平洋論叢. 2005, 15, p. 45-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ムハージル民族」への視角 —エスニシティの「統合」をめぐる—

近 藤 高 史*

1. はじめに

パキスタン・シンド州の州都カラチは国内最大の人口を擁する都市であり¹⁾、国内に二つある国際貿易港の双方を抱えている。1947年のパキスタン独立時には首都がおかれ、1959年に新首都イスラマバード建設が決定されて首都機能が移転してからも、産業・経済の中心地としてのカラチの地位は変わらず、現在でも国家税収の55%程度がカラチから徴収されている。

ヒト・モノの集積により、カラチにはパキスタン建国以来国内各地から多くの人々が職業機会を求めて流入してきた。この結果、多民族国家であるパキスタンの中でも、カラチは特にその多民族性という意味において、同国の縮図ともいふべき様相を呈するようになり、しばしば「ミニ・パキスタン」とも呼称される。そのため現在カラチはシンド州の州都でありながら、州名の由来であるシンディー住民は人口の7%にも達していないとみられる。これは国内の他の3州都（ラホール、ペシャワール、クエッタ）とは異なる、カラチの特徴の一つである。

そのカラチで最大のエスニック集団が「ムハージル(Muhājir)」と呼ばれる、インドからの移民とその子孫を中心とした、「主にウルドゥー語を母語とする」集団である。既に独立後50年以上が経過し、実際に彼らの中でインドからの移住を経験した世代の人口が少なくなっているにもかかわらず、移民としてのアイデンティティが保持されてきたことは興味深い。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究生

「ムハージル民族」意識をパキスタン社会に定着させたのは、1983年に結成された政党「ムハージル民族運動(Muhājir Qaumī Movement, 以下 MQM と略記)」の活動の影響によるところが大きい。したがって、ムハージルに関する研究も MQM を焦点に据えたものが多くを占めている²⁾。それらの中ではまず、パキスタン独立当初、他のエスニック集団(特にシンディー)と比較して優位な特権的地位をムハージルは得ていたが、1955～69年の西パキスタン統一州(「ワン・ユニット制」)、軍政長期化、国内北部からのシンド州都市部への移民流入、Z.A.ブットー政権下でのシンディー語州公用語化と公務員枠割当制の変更等の諸要因によって彼らの既得権益が「侵害」されていく過程を辿り、そういった特権的な地位の回復あるいは保全が MQM の主張の根拠になっていることを実証する。これをアイデンティティーの視点から考えると、当初「パキスタン人」アイデンティティーを最も体現していた存在であったムハージルが、やがて「移民」としての意識に覚醒し、パンジャービー、パシュトゥーン、パローチー、シンディーに並ぶ「第5の民族集団」としての認知を求めるようになっていく過程に対する分析が進められることが多い。

しかし、それらの研究ではムハージル集団内部の多様性に対する検討が十分になされず、MQM とムハージル社会との関係についても分析されることは概して少なかった。こうした傾向が生じた理由として、ムハージルという集団の都市中産階級的な性格に焦点が集中してしまっていること、MQM が限定的な特殊利益を訴える政党であるという事実に着目しすぎていること、またシンド州の地域特性を念頭においた議論がなされることが少なかったこと、が考えられる。特に、シンド州の地域特性についていえば冒頭のような、都市部におけるカラーチーの産業・経済・人口数といった指標における「突出」といった点がより考慮される必要があると思われる。

したがって小論では、先行研究での議論に則しつつも、以上のような問題点を補足する目的で、主にムハージルにとって言語アイデンティティーの有する意味、彼らの生活環境、及び彼らの「都市性」について検討を加えることとしたい。それによって「ムハージル民族」に関する考察に一視座を提供できればと考えている。なお、小論で MQM というとき、特記する場合を除いて「ムハージル民族運動」を指し、1997年の党名変更後の「統一民族運動(Muttahida Qaumī Movement)」について述

べたものではないことを断っておく。

2. 言語アイデンティティーの相対化

本来ムハーシルとは1947～51年にパキスタンへ移住したインド・ムスリムを指していた。そのうち小論が分析対象とするのは、移住者の18%が定住し、ムハーシルとしての強いアイデンティティーが保持されることになったシンド州の集団である。彼らはカラーチー人口の55%、カラーチーを除くシンド州人口の11.7%（いずれも1951年）を占めるようになり、都市部に集中して移住した。その理由は、ムハーシルのほとんどが都市出身者であったことである。そのうち、非熟練労働者はわずかに15.5%、その他は事務系・営業系労働者40%、サービス労働者16.8%、技術労働者（主に製造業）21.8%であったとされる。つまりムハーシルは中産階級的な性格が強く、カラーチーでいえば、ムハーシルは専門的・技術的職業ポストの60%程度を占めるようになった。しばしば「難民」とも訳される「ムハーシル」だが、原語に「抵抗運動」としての積極的な意味が含まれていることも含め、パキスタンに移住したムハーシルは決して「貧しく居場所のない難民」というイメージが該当するような集団ではなかったことは付言しておく必要があるだろう。

カラーチーからは多くのヒンドゥーが去っていったにもかかわらず、ムハーシルの流入により、分離独立期の間にその都市人口は約2倍に増大した。彼らは都市の中で独自のコミュニティを構成し、独自のエスニック・アイデンティティーを発達させていったのである。

ところで彼らは一括して「ムハーシル」と呼称されるようになるものの、その出身地域は旧英領インドのデリー、連合州、中央州、グジュラート州、ラージャスターン州、旧藩王領のハイダラーバード及びカシュミールの出身者が多く、北インドのウルドゥー語を母語とする人々が中心であったが、そればかりではなく、出身地によって母語を異にしていた側面もあった⁹⁾。例えば、パキスタンの大企業集団はじめ、メーモン、ボーフラ、コージャーといったグジュラートの貿易コミュニティ出身者が多かった。ムハーシルの移民コミュニティを総体的に見た場合、何らかのエスニックな共通項を見出すことは難しく、あえて言えば「移民である」と

いうことであった⁽⁴⁾。

上記のような理由からムハージル社会は当初一体性を欠いていたが、彼らも移住先の共通語としてウルドゥー語を用いたので、ムハージルにとってウルドゥー語は彼らのアイデンティティーになっていった。とりわけパキスタンがウルドゥー語を国語に定めた(1956年)ことは、ムハージルがパキスタン社会において支配的な地位を占めていく推進力となった。

ムハージル人口は、パキスタン国内で10%前後(1951年の調査による)を占めるにすぎない少数派であったにもかかわらず、ウルドゥー語が何故国語に選定されたのかという問題があるが、この理由は建国当初のエリート構成に起因するものであろう。西パキスタンで支配層を構成したのは資本家や高位の軍人であるが、ウルドゥー語話者のムハージルは双方に多数が進出しており、パンジャービーやパシュトゥーンは後者に多くの人材を輩出していた。エスニシティに関わらず、軍人の多くは植民地時代にデリーその他でウルドゥー語の教育を受けていた。いわばウルドゥー語はエリート層の社会的地位を支える言語として選択されたという経緯がある。加えて、独立後のパキスタンの経済発展がウルドゥー語を共通言語の地位に育て上げたことも否定できない。経済的繁栄を望む国民はウルドゥー語の修得が必要とされたからである。カラチが産業の中心地として発達するにあたっては、パキスタン初期に工場労働者として雇用されたウルドゥー語話者が重要な貢献をなしており、他言語集団出身の労働者も職を得ようと思えばウルドゥー語を使用せざるを得なくなっていたという事情があった。

パキスタン独立直後は、ウルドゥー語がムハージルの中心的なアイデンティティーになっていたとしても、彼らをムハージルとして組織化する集団は、ウルドゥー語話者が他の言語集団と比較し優位な状況に置かれていたことから未だ必要とされていなかった。独立当初、ムハージル集団はまずパキスタン・ムスリム連盟(以下、PML と略記)を支持し、その後ジャマーアテ・イスラーミー(以下、JI と略記)に代表される都市ムスリム知識人を指導層とする宗教政党にも支持が広がっていくことになるが、これら2政党は連邦制の強化には消極的で、むしろ中央集権化と旧英領インドのムスリムが一つの民族を構成するという「ムスリム民族論」に基づくパキスタン国民の創出を志向していたという点、あるいは党指導層にムハージ

ルが多く含まれていたという点において共通項があった⁶⁾。未だ地元に基づ盤を持たないムハーシルは連邦制による州自治の発展に警戒心を抱いており、パキスタン国語としてムハーシルの「母語」の使用が奨励されることは望ましいと思われていた。

つまり、これらのJIなど宗教政党との関係も、イデオロギーや利害の一致に基づくものであり、ムハーシルという集団に特化された利益を訴えるような集団の存在意義は見出されていなかったのである。

その一方、シンド州で起きたエスニック紛争の多くは、ウルドゥー語に特別な地位が与えられたことで敵寄せを受けた旧来からのシンディー住民が主体となって起きるケースが多かった。1957～58年にカラーチー大学が試験の際のシンディー語による解答を禁じたことに端を発する言語紛争などはその好例である。これらのシンディーによる運動は「非ムハーシルへのウルドゥー語学習の強制撤回」を一貫して要求しており、むしろコミュニティ外の動きに触発されてムハーシルがウルドゥー語を自らのアイデンティティーとして意識していった部分が大きかったとも考えられる。

しかし、ムハーシルが言語アイデンティティーを強く意識する契機となったのは、Z.A.ブットー政権下の1972年にシンディー語の州公用語化を巡って起きた紛争であろう。この紛争ではムハーシル・コミュニティがシンド州に移住してきたパンジャービーや宗教政党の支持も得てウルドゥー語の州公用語としての地位継続への保証を求めていくことになったのである⁶⁾。

表1：シンド州のエスニック構成(1981年)

	合計 (人口1,902万9,000人)	都市部 (人口824万人)	農村部 (人口1,078万9,000人)
ムハーシル	24.1%	54.4%	2.2%
シンディー	55.7%	20.0%	81.5%
パンジャービー	10.6%	14.0%	8.2%
パシュトゥーン	3.6%	7.9%	0.5%
バローチ	6.0%	3.7%	7.6%

注：「家庭内使用言語」による調査。ウルドゥー語話者はムハーシルとして計上されている。

出所：1981 Census of Sindh Province, Government of Pakistan (published in 1984).

同時にこの時期、ムハーシル内部での分極化が進んでいたことも看過されてはならないだろう。その大きな理由としては、1955～69年の「ワン・ユニット制」の導入で、シンド各地に移住してきたパンジャービーやバシュトゥーンのコミュニティが無視できないほど拡大し（表1参照）、ムハーシルが多く就業していたホワイトカラー層への職を求めるようになっていたこと、及びウルドゥー語教育の普及によりムハーシルのウルドゥー語話者としての有利性は以前ほど意味を持たなくなったことが挙げられる。ガユールとコーソンが1980年に行った研究では、1961年当時の西パキスタンでは第二言語としてのウルドゥー語を習得した人口がウルドゥー語を母語とする人口にほぼ匹敵するほどまで増加していたことが明らかにされている⁷⁾。以上のような状況下、さらに Z. A. ブットー政権によって既存の地域別公務員割当枠がシンド州のみ「都市部」「農村部」に分割されたことはとりわけムハーシルの経済的に恵まれない人々、特に割当制により留保された就職枠に希望を託していた人々の間に疎外感を引き起こしたであろうことは想像に難くない。ファルハット・ハックは、ムハーシルが「以前自らが有していた有利な立場が有名無実化しつつある」との現状認識を持つことを、「相対的収奪 (relative deprivation) 感覚」と呼んだ⁸⁾。

こうしてシンド都市部においては、パキスタン国語の話者であるという有利性の恩恵を十分に享受できなくなった人々が下層中産階級として取り残されていき、コミュニティ内部で疎外感を深めていたのである。こうした疎外感が1980年代に入って MQM が掲げる「下層中産階級の利益擁護」という主張に繋がっていったと考えられるが、それらは当然ながら社会福祉、保健衛生問題など生活面全体に関わってくる。換言すれば言語アイデンティティーだけではムハーシル下層中産階級の利害を表現・網羅できなくなっていった、といえるだろう。

このようにして、それまでムハーシルの間に共有されていた（信仰のゆえに故郷を捨てた、という）「パキスタン人が模範とすべき姿」としての自己認識がムハーシル・アイデンティティーに移行し始め、やがて MQM によって組織化・動員されていくことになる⁹⁾。もちろん言語はアイデンティティー形成の有力な構成要素になりうるが、彼らが強調することは、もはやウルドゥー語の地位の保証ばかりではなくなった。ハムザ・アラヴィーによれば「一晩のうちにエスニシ

ティの再定義が行われた。ムハージルは…JI やジャマーアテ・ウラマーエ・パキスタンを捨て、新しい MQM に従った。コミュニズムが終焉に向かうのではなく、MQM の台頭はパキスタンにおけるコミュニズムの強化を意味するものであった」のである⁽¹⁰⁾。MQM はまた宗教政党に対しても、「…イスラーム派の理論はパキスタン民族の確信にとっては…無力な仮説であった。それは我々ムハージルにとって苦い経験であった」として⁽¹¹⁾、批判的な姿勢を示した。

1983年にアルターフ・フセイン指導下に結成された MQM は、非エリートの青年層による指導といった特徴のゆえに、パキスタン政治史における例外的特徴を示すようになった⁽¹²⁾。

MQM に対しては、ムハージルが未だにパキスタン社会において官僚、民間企業における支配者の地位を占め、マス・メディア、医療部門、法曹界、教育機関等に多数の人材を輩出していることから、彼らが抑圧されているという主張には根拠がない、という批判が向けられてきた。またムハージル民族意識に対して、ムハージルとはインドから移住してきた人々の一時的な自己認識の現れであり、彼らは一つのエスニック集団に属するわけではなく、北インドをはじめとする様々な地域の出身者が集ったものである、という批判も向けられた。確かに、現在でもカラチーのグジャラーティー系住民の間では日常商取引ではグジャラーティー語が使用され、同語による新聞も発行されている実例がある⁽¹³⁾。

これらの批判は正鵠を得たものではあるが、MQM はそれに対し、ムハージル社会の内部には多くの共通性（言語、文化的類似性、インドからの移住経験、支配階級への敵意、歴代政権下での多くの苦しみ）がある、として「ムハージル民族」を正統化した⁽¹⁴⁾。そうした彼らの主張の中からは、「…ムハージルに権利の保護のため、またその優れた文明と歴史的文化遺産の振興のため、1つの州が彼らに提供されるべきである。パキスタンの創設者たちがパキスタンに絶望したり、そこから排除されたりしてはならない」というように、ムハージルの多住するカラチーを分離州にしようというような急進的な主張が導き出されることもあった⁽¹⁵⁾。この辺りにもムハージルの諸要求が言語の地位のみに留まらなくなったことが現れている。

ともあれ、MQM はシンド都市部のウルドゥー語を話すムハージル・コミュニ

ティーの間に幅広い支持を獲得し、彼らの「ウルドゥー話者」としてのアイデンティティーを相対化させつつ、ムハーシル指導層の間に世代交代を実現した。言語アイデンティティーはもはや主張の中心におかれず、アイデンティティーの一構成要素とされはじめた⁽⁴⁶⁾。ムハーシル社会においては、コミュニティ動員のために選択される象徴としての言語が有する意味は低下したのである。

3. ムハーシルと MQM—エスニシティ—と階級の狭間—

ムハーシルの都市的性格についてはこれまで何度も指摘されてきたが、彼らの間でムハーシルとしてのエスニック・アイデンティティーが深化しはじめてから MQM が急成長を遂げるに至った時期にかけて、ムハーシルの都市での生活環境はどのようなものであったのだろうか。

ここでカラーチーのムハーシル居住地を概観してみる。パキスタン建国当初、カラーチーに流入したムハーシルの大半は最初市街地中心部（サダル地区）に集中したが、その後富裕層は郊外に住宅を得て移住した。さらに、引き続きサダル地区に留まっていた人々に対しても、パキスタン政府が行政機能の中核地域近隣に生活不安を抱える移民が集まることへ不安を感じはじめたことから、ムハーシルを中心部から遠ざけて定住させる計画が進められることになった。これは GKRP (Greater Karachi Resettlement Plan) と呼ばれる計画の一環であり、アユーブ・ハーン政権下の1958年、新首都イスラマバード開発計画を担当したギリシャ人建築家ドクシアディスを中心に策定された。

GKRP はムハーシルのために新住宅地ランディー、コーランギー（いずれもカラーチー南東部）、ニューカラーチー（同北部）といった住宅地を開発し、彼らをここに定住させようとするものであった。しかしこの計画では市内中心部への距離が平均25 km前後にまで延びることになり、通勤時間や交通費の負担増という問題が生じた。また彼らの居住区近くに工業団地を設立する試みもあったが投資が進まず、GKRP 自体は1964年に放棄されてしまう。但し、この計画が途中まで実施された後で放棄されたため、住宅不足が深刻になっていたにもかかわらず、市内中心部にムハーシルのコロニーが残ることは不可能になった。

GKRP 放棄後、Z. A. ブットー政権時代に1975-85年のカラーチー・マスタープランによってオーランギー、バルディア・タウン（いずれもカラーチー北西部）が住宅地として開発された。周知の通りブットー「社会主義」政権期は公的部門に権益が偏在する結果を生み出したが、その弊害は住宅開発計画にも及び、新規開発予定地は行政官僚らの投機の対象となって住宅・土地価格が高騰し、本来予定されていた中産階級に住宅が十分に行き渡らない形で現れた⁽¹⁷⁾。かかる事態はブットー政権崩壊後も是正されず、1988年時点でも、カラーチーでは土地の94%が州政府、カラーチー開発局、カラーチー港湾局等の公的機関やその天下り先の所有下に置かれていた。この間、informal developer と呼ばれる非合法の住宅開発業者が公的機関にロビー活動を行って公有地開発権を次々と取得していったが、彼らの中には住宅予定地の用途をより収益性の高い商業地域や産業地域へと不法に指定変更する業者も多く含まれていた。

住宅問題に拍車をかけたのが1977年に始まる中東への出稼ぎ労働である。海外出稼ぎ労働者の郷里送金により1977～87年の間、パキスタンには200億ドルもの資金が流入したとみられている。しかもその大半の資金は直接投資ではなく、不動産投機に振り向けられ、地価上昇原因の一要因をなすと同時に中産階級内部の経済的格差を強めた。1973～89年にかけて、上層中間所得層の割合はカラーチー住民の3.43%から26.7%に増加する一方、下層中間所得層も同じく14.42%から31.4%と増加し、後者は住宅行政への不信と共に「上昇気運に乗り遅れた者」としての意識を強めていったと考えられる⁽¹⁸⁾。

並行時期に、雇用創出促進を目的としてカラーチー東部にはカラーチー製鉄所、輸出加工地域が設立され、その周辺地域には労働者のための住宅地整備も進められた。しかし住宅・土地価格の上昇が原因でこれらの住宅地には一般の労働者が住むことはなかった。

結局、居住地を確保できなかった人々は産業地区周辺に不法占拠住宅地を形成していくことになるが⁽¹⁹⁾、これらの中にもムハーシルが多く含まれており、ムハーシルの居住区はカラーチー中心部を包囲するように広がっていった。外部からの人口流入に加え、住宅行政の破綻の結果、カラーチーでは市街地の外縁部に下層中産階級が多住するというパターンが固定化していったのである。

ジャラーザイーはムハーシル居住区の1つで、ウスマーニーア・ムハーシル・コロニーと呼ばれる地域の生活実態調査を1973年と1983年の2度にわたって行い、この間のムハーシル住民の生活水準の変化について考察している。同地域の住民は、1960年代のGKRPによる郊外移住計画、またその後カラーチー・マスタープランによる移住計画があったにもかかわらず、通勤距離が長くなることによる交通費上昇がネックとなり移住を思い止まった人々であり、いわば典型的な下層中産階級といえよう。その調査によれば、1973年から1983年にかけて、一戸あたりの平均所得者数(A)は1.65人から1.76人へ、所得者に対する一戸内の平均依存者数(B)は2.63人から3.08人へとそれぞれ変化している。すると依存者一人あたりの生活を負担している所得者数(A+B)は単純計算で0.63人から0.57人へと減少しており、所得者への負担が重くなっていることがうかがえる。この間、住宅事情の改善は進んだが、それでも24%の住宅の構造はkachâ(壁が石や泥でできている仮家)あるいはpakkâ(漆喰のされていない、セメントブロックからなる家屋)と呼ばれる低水準の住環境に置かれていたことが明らかにされている⁽²⁰⁾。

加えて、表2のように1970年代から80年代にかけて、シンド州都市部で出生率が上昇すると同時に、死亡率・幼児死亡率も上昇しているが、その上昇はパキスタン全体より幅が大きく、「持たざる者」の生活が逼迫していたことも判る。

表2：シンド州都市部の出生率・死亡率・幼児死亡率

	出生率	死亡率	幼児死亡率
1976-79年	33.7(38.4)	6.1(8.2)	57(74)
1984-86年	40.2(40.1)	8.5(8.7)	86(92)

注：数値は全て1,000件あたり、1年以内の件数を基に算出。括弧内はパキスタン全体の数字。

出所：Database of Social Policy and Development Center (SPDC), Karachi.

1970～80年代にかけての、都市内での「取り残された者」としての疎外感と改善が進まない生活状況が、MQMの勢力拡大の背景にあったことは理解に難くない。しかもムハーシルが最も多く居住するカラーチーでは国内のみならず国外からの移住者も絶えず流入しつづけており、労働市場においてムハーシルの競争相手と

なっていた。1987年に出された26か条の MQM 目標決議 (Qarârdâd-i-Maqâsid) は「政府の政策により、他州出身者すらシンドに職を求めて移住してきている。このことはシンドの重荷になっているのみならず、ムハーシルやシンディーの大量失業に繋がっている」と述べている⁽²¹⁾。

実はこうした中、前項2. で述べたようにカラーチーをシンド州から分離した独立州にしようという動きがムハーシル社会内部、特に学生層から度々提起されてきた。この所謂「カラーチー州」構想は一つの体系的な計画になったことも、実現に向けた大きな動きに結びついたこともなかったが、独立州設立の根拠としては、①パキスタンは言語州に分かれており、カラーチーはムハーシルが最も多く居住する地域である、②カラーチーはシンド州の財源確保に多大な貢献を行っているにもかかわらず、州予算は内陸部に振り向けられカラーチーは応分の予算を充当されていない、③カラーチー住民の雇用を守るために、国内他地域からの流入者を制限する必要がある、といったように、ムハーシルの利益を保護する内容を色濃く反映していた⁽²²⁾。

しかし興味深いことに、カラーチーのシンド州からの分離については、MQM はじめムハーシルの指導者はこれに対して積極的な態度をとらず、この構想を放棄している⁽²³⁾。例えば1987年6月に、MQM のイデオログであったムハンマド・ウル・ハック・ウスマーニーはムハーシル学生に向け以下のように書いている。

「第一に、カラーチー州はムハーシル・アイデンティティーの基礎の上に創設されることはない。第二に、この政策はムハーシルの利益に反する。それはシンド内陸部にも多くのムハーシルが住んでいるからである。我々は、ムハーシル住民の故郷がシンドであること、ムハーシルの登録 (domicile) はシンディーであることも理解している。…パキスタンの建設・発展において、ムハーシルは中心的な役割を果たした。故に、ムハーシルのこの国に対する愛情と支持は全く当然のことであり、パキスタンの社会発展と民主主義樹立の活動に対し、ムハーシルは常に支持を与えてきた。…ムハーシルがシンディーの自由獲得への運動に参加することは、シンドと正しい意味においてムハーシルが結ばれる唯一の道である。そうした事情を知れば、カラーチーがシンドと結びついていること

が何故必要なのかを推測できよう。今、以下のように信ずる。すなわちシンド都市部・農村部の人民は封建支配と官僚支配を挫折させるための統一戦線を組む道を取り入れることで、シンドに明るい将来をもたらすことができるであろう⁽²⁴⁾。

ムハージルのシンディーに対する「先進性」が前提とされていることはさておき、ここで表明されている、MQM がカラーチー独立州設置に反対する理由は、もしそれが設置された場合シンド州内陸部のムハージルが孤立してしまうこと、及び「民主的な」ムハージルがシンディーの「自由獲得運動」と連帯することが不可能になってしまうこと、への懸念である。しかし、MQM がパキスタン人民党（PPP）やシンド・ナショナリスト諸政党等の他党との間で、非常に短い期間しか協力関係を築いてくることができなかったこと、あるいは PONM（Pakistan Oppressed Nations Movement 「パキスタン被抑圧民族運動」）といった民族横断的な運動体への加入を拒否されてきたことはこうした理由づけと符合しないところが多い⁽²⁵⁾。

MQM 党首アルターフ・フセインはその著書の中で「どんな国家の土地も…、そこに住む人間はその土地から自らの利益を得ることができる。…このことはそこに住む全ての人間の宿命である。このことは広く受け入れられている」と述べている⁽²⁶⁾。しかし MQM は自らが求める利益の配分を他集団も求めるということを認めることができずにいたという限界を抱えていた⁽²⁷⁾。一方的に MQM 側に問題があったわけではないにせよ、他党との関係構築において多くの問題を引き起こしてきたことを勘案すれば、ウスマーニーの挙げるような理由を文字通り受け取ることは難しい。

むしろ、カラーチー分離州に反対する現実的な理由は、「ムハージル唯一の代表者」としての地位を確保したい MQM の意図に裏付けられたものであるとも考えられよう。それはエスニシティの支持を結集したいという意図にも支えられているが、MQM の組織運営上の問題でもある。

例えば、MQM の資金源は米国・英国・中東諸国からの海外送金のほか、国内ではシンド都市部の市民・企業からの「寄付（chandah）」や「保護料（bhattā）」の徴収に依存していたが、その金額は一口あたり100ルピーから数10万ルピーまで

と幅広かった。しかしこれらを自発的に納入する人々は中産階級や下層中産階級であり、多くの金額徴収は見込めなかった⁽²⁸⁾。大口の資金を集めるためには、どうしても富裕層からの資金が必要であったが、ムハージルの富裕層は後述するようにシンド州内陸部に土地を得て不在地主となっている場合も多く、彼らをシンド州内陸部に置き去りにし、異なった行政単位の中にムハージルを分断することは党運営上から望ましくなかった、とも考えられる⁽²⁹⁾。

ともあれ、MQM はシンド州という枠組の中で自らの政治的要求の実現を目指していくようになった。MQM は都市の下層中産階級を基盤として結成された政党でありながら、ムハージル集団全体の、しかも唯一の代表者としての「顔」も維持しなければならならず、エスニシティと階級との間で常に揺れ動いていたのである⁽³⁰⁾。1997年7月26日に MQM は党名から「ムハージル」を削除し、「統一民族運動」と変更して全国政党への脱皮を試みる姿勢を示しているが、党名変更されても指導部は事実上ムハージルにのみ開かれており、その性格はさほど変化していない⁽³¹⁾。今後階級とエスニシティとの間のバランスをどう図っていくのか注目されるところである。

4. 「都市」「農村」の区分

シンド州ではしばしば「都市部」「農村部」という区分がなされるが、この区分が重要な意味を持つのは、中央官庁への採用枠割当制が都市－農村の区分に基づいて適用されるからにほかならない。すなわち、Z. A. ブットー政権期にシンド州向け割当枠の分割（都市部40%、農村部60%）が行われたことにより⁽³²⁾、都市部と農村部のいずれに住民登録（domicile）があるかによって適用される割当枠が異なるようにされたが、同政権期にはその適用範囲が拡大され、連邦政府の付属機関、州政府、教育機関、公社にも及んだ。ブットーが1972～76年にかけて企業の国営化を進めたため、公的部門が大幅に肥大化し割当制の及ぶ範囲は拡大したのである。

割当枠の都市－農村間での分割が行われたのがシンド州だけであったことは、都市に住むムハージルの「相対的収奪感覚」を当然ながら助長した。1977年7月

にはズィアー・ウル・ハックがクーデターを起こし Z. A. ブットー政権を打倒したが、彼はブットーの変更した割当制をそのまま継承したばかりか、1982年には自らの支持母体である軍への配慮から軍人（退役者を含む）の割当枠を留保する措置をとった⁽³³⁾。ムハージルは最初ズィアーのクーデターを歓迎したが、彼らを取り巻く環境は不本意にも一層厳しいものになったのである。

こうして、都市－農村という区分は割当枠の調整のため用いられてきた。しかし、実際の割当枠の運用状況を検討してみると、シンド州の「都市＝ムハージル、農村＝シンディー」という図式にも問題点が存在することが判明する。

まず、「都市」の定義であるが、パキスタンにおいては「人口5,000人前後かそれ以上の地域」とであるとされている⁽³⁴⁾。この定義に従って行われた1972年の調査では州人口の40.45%が都市部に住み、1961年では37.85%、1981年では43.32%が住んでいた。

しかしフェローズ・アフマドによれば、割当枠の中で言う「都市」と実際に人口調査が行われた際の「都市」は、後者を根拠に前者の比率が決定されているにもかかわらず異なる、という。彼によれば割当枠の中で「都市」に位置付けられているのはカラーチー、ハイダラーバード、サッカルのみで、ムハージルも相当数が居住するミールプール・ハース、ナワーブシャー、ダドゥー、ジャコバーバード、コートリ、シカルプール、ラールカーナーといった都市は農村部に含まれる。1972年の人口調査では、カラーチー、ハイダラーバード、サッカルを合計した人口はシンド人口の31%を占めていた。このシンド州内で31%の人口が集まる「都市部」に、1972年人口調査による40.45%という数字を根拠にして40%の割当が行われたのである。すなわち、これら3都市からなる「都市部」には人口比よりもさらに3分の1多い割り当てがなされ、実際に都市部に割り当てられる役職数は、割当枠適用上の「都市部」住民の比率よりも高くされていたのである⁽³⁵⁾。

また、都市に割り当てられたポストが必ずしもムハージルに行き渡らないことや、逆に農村部に割り当てられたポストがムハージルに渡ることもある。ムハージルの大半が都市に住んでいることは事実であるが、それは全てのシンディーが農村部に住んでいることを指すわけではない。行政措置上の都市－農村の区分形態は必ずしもエスニシティの境界線と一致せず、またその区分は非常に不明瞭な

のである。

シンド州内陸部に住むムハーシルの動向にも注目する必要がある。下表3は1981年のシンド州の郡 (District) 毎の主要言語集団の比率を示したものである。

表3：シンド州各郡の主要言語集団比率(1981年)

	シンディー	ウルドゥー	パンジャービー	バシュトーン	パローチー
ジャコババート	69.13%	--	--	--	21.34%
サッカル	73.54%	12.66%	6.37%	--	--
シカルプール	86.48%	--	--	--	--
ラールカーナー	78.43%	--	--	--	6.98%
ハイルプール	80.48%	--	8.50%	--	--
ナワーブシャー	66.18%	8.11%	10.58%	--	--
ダドゥー	81.55%	--	--	--	7.39%
ハイダラーバード	56.48%	28.10%	--	--	--
サーンガル	56.10%	10.75%	9.44%	--	--
タルバルカル	71.78%	8.39%	5.78%	--	--
バディーン	81.64%	--	6.40%	--	--
タッター	92.06%	--	--	--	--
カラーチー(Division)	6.29%	54.3%	13.6%	8.7%	4.39%

出所：Census Reports of Districts (1981), Government of Pakistan.

同じムハーシルでも、カラーチーに移住した集団とシンド内陸部に移住した集団とでは構成が異なっていた。最初、カラーチーに移住したムハーシルは概して教育水準が高く、非熟練労働者はそのうち僅か10%であった。また官僚や裕福なビジネスマンといった上層中産階級の多くもカラーチーに移住した。一方内陸部のムハーシルは当初から下層中産階級出身者が多数を占めていた。しかも、カラーチーのムハーシルとは異なり、シンド内陸部のムハーシルにはシンディー社会の中に棲み込む形で生活していた人々も多くいた。シンド内陸部のムハーシル子弟は、1955年の「西バキスタン州」誕生によりウルドゥー語学習が強制されてもシンディー語の学習をやめなかったという。カラーチーと内陸部に居住するムハー

ジルの間では他のエスニシティとの関係にも相違が見られたのである。

シンド州内陸部のムハーシルが旧来からの住民との間に距離が生じ始めたのは、パキスタン政府がムハーシルのためにヒンドゥーの残して去った耕地の一部を、インドに残してきた財産の「補償」として分配したことに始まる⁽³⁶⁾。またコートリ、グッドゥ、サッカル（いずれもインダス川沿岸地域）に取水堰が建設された時も、耕作可能になった土地がシンディーに分与されることはなく、僅かな余剰地も高級官僚や軍人に分配された。しかもムハーシルを含めパキスタン政府の「補償」政策により地主となった階層には、不在地主となってシンド州都市部に実質上の生活拠点を置く者が多くあった。こうしてシンディーは被差別者という意識を抱くことになり、両コミュニティの溝は深まっていった⁽³⁷⁾。

パキスタンでは軍政期には軍人・官僚層に土地を付与する政策が採られることが多い。アイユーブ・ハーン政権期の1958年には、シンドの新開拓地を非シンディーの退役軍人や官僚に分与するという決定が再びなされ、シンド内陸部のムハーシルも旧来からの住民との接触が薄くなり、以降彼らはシンディー語の学習意欲を急速に失っていったとされる。ズィアー政権時代（1977～88年）、サッカルで官僚・及び退役軍人に土地を付与する政策が続けられ⁽³⁸⁾、シンディーとの棲み分けが進み、ムハーシルは自らが少数派であるという意識を深めていくことになった。さらに、1972～73年にシンド州内陸部で言語暴動が起きて以降は、ムハーシルは危険を避けてシンド内陸部を後にし、安全な環境を求めカラーチーやハイダラーバードに逃げ込んだ。シンド州内陸部ではムハーシル人口は漸減傾向にある⁽³⁹⁾。全体としてムハーシル・コミュニティはカラーチー、ハイダラーバードへ「2極集中」して居住する方向へと向かっているが、ムハーシルの中にはカラーチーと内陸部に親族と分かれて住む場合も多く、カラーチー情勢がシンド州内陸部のそれに与える影響は重要である⁽⁴⁰⁾。

5. 結び

MQM 総裁アルターフ・フセインによれば、ムハーシルの構成は①分離に伴いインドから移住してきた人々、②その後インドから移住してきた人々、③バング

ラデシュ独立に伴いバングラデシュから移住してきた人々（ビハーリー）、④今後
もインド、バングラデシュから移住してくる人々、であるという。そしてこれら
の人々は社会的・経済的・文化的・政治的に差別され、地方・州・連邦や民間部
門においてその正当な「分け前」を奪われてきたと考えている、という⁽⁴¹⁾。

これら①～④の構成要素だけでもかなり広範な階層を巻き込むことになるが、
これまで検討したように、ムハージル集団内部にも出身地、階級、定住先によっ
て多様性が認められるのである。彼らの「共通する特徴」とされるウルドゥー語
も、これだけでは政治動員を図る上では不十分になってしまった。また「都市性」
についても、農村との区分が曖昧なまま残された。MQM が非常に強い組織力を
有していたのとは対照的に、ムハージル社会は一体性を欠いていたのである⁽⁴²⁾。
むしろムハージルのアイデンティティーがはっきりしていなかったために、MQM
はエスニシティの統合を図る必要が生じ、強力な組織力と時に暴力的な政治動員
に依存するようになっていったともいえる。パキスタンでは多くの民衆運動が展
開されてきたが、国民の広範な支持を受けて行われる例は少なく⁽⁴³⁾、その都市中
産階級的な主張の中にはある程度国民の共感を獲得できる可能性を有していなが
ら、MQM の運動もそうした限界を克服できなかった。

「ムハージル」は、移民の都市問題に代表される移民の「相対的収奪感」を背景
にコミュニティの政治化が強引に進められた際に表出し、定着してしまったエ
スニシティといえる。パキスタン社会ではカラーチーを中心とした都市部の生活・
環境・雇用問題が解決とは程遠い状態にあるため、ムハージルの「統合」は継続
しているが、分解してしまう可能性を常に内包している。

もちろん、ムハージルがパキスタン独立後徐々に政治過程の中心から切り離さ
れ、疎外感を抱くようになったことは確かである。カラーチーについていえば、
この大都市の抱える諸問題について連邦・州政府、政党や種々の運動体が対話の
座につく機会が非常に少なかったという、民主主義の定着上の問題もあるが⁽⁴⁴⁾、
ムハージルを政治プロセスに適切な形態で関与させていく努力は今後とも試行錯
誤を重ねつつ進められていくと思われる。

注

- (1) 1998年のパキスタン人口調査(最新)では980万人、2004年のカラーチー市長による発言によれば約1,400万人となっている。
- (2) この点については、とりあえずTariq Rahman, "Language and Politics in a Pakistan Province," *Asian Survey*, Vol. 35, No. 11 (1995)., Hamza Alavi, "Politics of Ethnicity in India and Pakistan," in Hamza Alavi and Harris John (eds.), *Sociology of Developing Countries : South Asia*, London, Macmillan, 1989.など。
- (3) Ayesha Jalal, *Democracy and Authoritarianism in South Asia : A Comparative and Historical Perspective*, Lahore, Sang-e-Meel Publications, 1995., pp.194-195.
- (4) M.S.Korejo, *A Testament of Sindh : Ethnic and Religious Extremism*, Karachi, Oxford University Press, 2002., p32.
- (5) W.C.スミス『現代イスラムの歴史(下)』(中村廣治郎訳)中央公論社:1998年、116頁。なおパキスタン初代首相となったリャークト・アリー・ハーン首相(PML 所属)には、当初ムハージルをシンド州各地に計画的に分散移住させる計画があったにもかかわらず、ムハージルの政治家が選挙基盤を確立するためにカラーチーへのムハージル大量流入を認めたのではないかと、という「疑惑」も提起されている。Tariq Rahman, *Language and Politics in Pakistan*, Karachi, Oxford University Press, 1997., p113.
- (6) 最初の PPP 政権下で、ウルドゥー話者の1,300名の公務員が解雇されたとみられている。
- (7) Mohammad Arif Ghayur & J.Henry Korson, "The Effects of Population and Urbanization Growth Rates on the Ethnic Tensions in Pakistan," in Manzooruddin Ahmed (ed.), *Contemporary Pakistan : Politics, Economy, and Society*, Karachi, Royal Book, 1980. p209.
- (8) Farhat Haq, "Rise of the MQM in Pakistan" *Asian Survey*, Vol. 35, No. 11 (1995)., p991.
- (9) Rahman, *Language and Politics in Pakistan*, p127.
- (10) Alavi, op. cit., p243.
- (11) Azim Ahmed Tariq, "Pākistānī Nēṣonalism aur Nēṣonalism ka 'Almi Tasawwur," in Ahmed Salim (ed.), *Muhājir Qaumi Mūvmēt*, Lahore, Sārang, 2000. p58.
- (12) Veena Kukreja, *Contemporary Pakistan : Political Process, Conflicts and Crises*, New Delhi, Sage Publications, 2003. p143.なお、MQM は全パキスタン・ムハージル学生連合を母体にして創設されたが、急激な勢力伸張や武装組織の活動など、単純に学生組織から発展したとは考えにくい部分があり、今後検討されるべき課題といえよう。
- (13) Feroz Ahmed, *Ethnicity and Politics in Pakistan*, Karachi, Oxford University Press, 1998., p243.
- (14) Kukreja, op. cit., p146.
- (15) Tariq, op. cit., p59.
- (16) 但し、言語が未だ重要なアイデンティティーであることはいうまでもなく、PPPと連立政権を1989年に組んだMQMは、PPPとの合意の中で言語の保護に関する項目を盛り込んだ。そこには「文化は我々の毎日の生活において中心的重要性を占める。それは共同体全体の体験の必須事項である。異なる文化と言語を有する州の住民はそれらを保持し、促進する十分な権利を有する」とある。

- (17) Arif Hassan, *Understanding Karachi*, Karachi, City Press, 1999. pp. 23-33.
- (18) Ibid., pp.59-66.
- (19) Ibid., pp.40-42.
- (20) Musa Khan Jalazai, *Sectarianism, and Politico-Religious Terrorism in Pakistan*, Lahore, Tarteeb, 1993. pp.241-248.
- (21) MQM 目標決議はウルドゥー語で書かれ、36ページに及ぶ文章から成る。要約すると以下①～⑨の通りだが、他の移民集団へ向けられた政策要求が多く含まれている。①「真の」シンディー(ムハージルとシンディー)のみがシンドにおいて選挙権を持つ、②商業免許や許可証は選挙権を有する者だけに与えられる、③「孤立したパキスタン人」(＝ピハリーのこと)の定住とパキスタン市民権が認められるべきである、④アフガニスタン難民は北西辺境州とバローチスタン州の正式な難民キャンプ内のみ居住が認められるべきで、シンドに財産や居住地を持つことは許されない、⑤バスの運行はカラチー都市公社(Karachi Municipal Corporation, KMC)が行うべきで、バスの運転手は免許取得の前に識字者であることが確認されるべき、⑥シンディーでもムハージルでもない者はシンドで財産を有することは許されない、⑦シンド州では最新の人口調査が行われるべきで、真のムハージル人口に基づいて連邦公務員枠の留保率の改定がなされるべきである、⑧連邦割当枠適用のためのシンド居住権取得には、州に20年継続して居住することが求められる、⑨ムハージルへの残虐行為に関与している警察官(当時は多くがパンジャービー、筆者)は特別裁判所で裁判にかけられるべきである。
- (22) Mohammad-ul-Haq Usmānī, “Karāchī Sūbah : Asl Haqāiq Kyā Hai?,” in Salim (ed.), *Muhājir Qaumi Mūvment*. p21.
- (23) 浜口恒夫「パキスタンにおける都市化と民族問題—カラチーの『ムハージル』を中心にして—」(『大阪外国語大学論集』第6号：1991年)262頁。
- (24) Usmānī, op. cit., pp. 17-21.
- (25) シンド民族主義政党は数多く存在するため、その対応振りも一致していないが、PONMへのMQMの加入に最も強く反対しているのは人民運動(Awami Tehrik)のラスール・バクシュ・バリジョーである。但しシンドの民族主義政党も、どの政党が「シンディーの代表者」であるかを巡りセクト争いを繰り広げてきた側面がある。*The Herald*, November 2000, pp.51-53.
- (26) Altāf Hussain, *Pākistan ki Azādi ke Pachās Baras : Kyā Khōyā Kyā Pāyā*, London, MQM International Secretariat, 2004., pp.33-47.
- (27) Korejo, op. cit., p31.
- (28) Haq, op. cit., pp.1002-03.
- (29) MQMの財務局が資金徴収を行っているが、強制的に徴収された者は生命の危険を感じて告発することはないという。
- (30) Owen Bennett Jones, *Pakistan : Eye of the Storm*, Lahore, Vanguard, 2002., p125.
- (31) この点に関し、MQM総裁アルターフ・フセインは「我々は長い間国内の小さな州は応分の権利を付与されるべきであると要求してきた」と述べている。またMQM元事務局長

であったイムラーン・ファルークは「政治アイデンティティーとしてムハージルという言葉を使うときの多くの目的は、その言葉が特定の領域との関連性を含んでいないからだ」と述べている。なお、「統一民族運動」は2004年以降ラーホールにも支部を創設しようとしたが、その作業は進んでいない。

- (32) パキスタン全体の留保枠に占める割合は、シンド州都市部が7.6%、農村部が11.4%となる。
- (33) Charles Kennedy, “The Politics of Ethnicity in Sindh” *Asian Survey*, Vol. 31, No. 10 (1991), p945.
- (34) シンドで「都市」というとき、それはカラーチーそのものを指す傾向も強い。確かに国内最大の都市はカラーチーであるが、それでもカラーチーにいる都市人口はシンド州全体の都市人口の60%程度で、残り約40%はシンド内陸部の他都市に住んでいるとみられる。
- (35) Feroz Ahmed, op. cit., pp.149-153.
- (36) ヒンドゥーが残した土地は5,443km²であったが、そのうちパキスタン政府がムハージルに分配した耕地面積は、3,237km²である。
- (37) Suranjan Das, *Kashmir and Sindh*, London, Anthem, 2001., pp.109-110.
- (38) Kennedy, op., cit., p941.
- (39) 「ウルドゥー話者」をムハージルと読み替えるならば、以前はムハージルがハイダラーバードで最大のエスニック集団であったが、現在はその地位をシンディーに譲っている。
- (40) Jâvêd Jibâr, 1985-91 : *Che Sâl, Chiyâlîs Sawâl*, Lahore, Jang Publishers, 1992, p57.
- (41) Kennedy, op. cit., p950.
- (42) 今後、異なるエスニック集団間での通婚の進行状況についても検討することが求められよう。
- (43) Jibâr, op. cit., p37.
- (44) Ibid., p58.

Analytical Research to Muhajirs, from a Viewpoint of Ethnic Unity.

KONDO Takafumi*

In Sindh province of Pakistan, Muhajir Qaumi Movement (MQM), which was a political organization established in 1983, had intensified their political activities in urban areas since mid-1980s. This paper aims to analyze the relationship between Muhajirs and MQM, taking into consideration the regional characteristics of Sindh, urban-rural relations and the diversity within Muhajir community.

When Muhajirs immigrated from India to Sindh, their original hometowns ranged wide area in North India, like ex-United Province, Gujrat, Rajasthan, Maharashtra, and so on. Although most of them spoke Urdu as a common language, their ethnic ties were not so strong. Their point in common was only “being immigrants.”

After independence of Pakistan, Government of Pakistan declared that Urdu was Pakistan's national language. This decision brought more advantageous position to Muhajir people in the labor market than other language groups in Pakistan. Especially, their advantage was prominent when they got employed in government officials.

This paper examines the transformation of Muhajir's advantageous position under the Pakistan's political fluctuations. For example, through the analysis of Muhajir's housing problems and living situation from 1950s to 80s, it is possible to point out that the influence of the decline of Muhajir's advantageous position, seriously hit the living conditions of lower-middle class of this community. This process was an escalation of disparity in wealth among Muhajirs. The rise of MQM had the background that Muhajir lower-middle class strengthened their ethnic identity.

* Research Student, Graduate Program of Asia-African Studies of Kyoto University

However, MQM had some ideological contradictions. As its supporting basis depended on lower-middle class in urban Sindh, the political demands of MQM reflected their class-conscious interest. When MQM put its weight on class-consciousness, the importance of Urdu or language became more relative in stressing Muhajir identity than before. Therefore, the symbol to mobilize the Muhajirs was ambiguous. MQM had to keep and protect their stance as a spokesman of Muhajir lower-middle class as well as a representative organization of all of the Muhajir people. The fact, that MQM officially rejected the “Independent Karachi Province” conception which had often been brought up by Muhajir students or intellectuals, indicated this dilemma of MQM. MQM faced the difficulty that it should cope with both class-conscious interest and ethnic appearance.

Besides, when MQM insisted on the ethnic interest of all Muhajirs, their political demands based on unequal views to recover the previous advantage which they had enjoyed in the early days of Pakistan. It should be mentioned that “urban characteristics of Muhajirs” had an pragmatic aspect because the urban-rural division of Sindh was derived from quota system of government officials. It is natural that their insistence was unacceptable to non-Muhajir groups and caused ethnic conflicts easily.

In this way, Muhajir society involves two problems, that is, inner diversity and coordination of interest with other ethnic groups, while seeking for a proper way to assure their participation in the political process.